

古川大臣によるスピーチ（概要）  
（平成 24 年 9 月 26 日 JAXA 筑波宇宙センター）

（はじめに）

JAXA の職員の皆様、おはようございます。宇宙政策担当大臣の古川元久です。本日は皆様お忙しい中こうしてお集まりいただき、また、先ほどは立川理事長を始め皆様に施設内をご案内いただき、心より感謝申し上げます

私は、皆さんよくご存知のマンガ「宇宙兄弟」の大ファンです。先ほど、こちらの施設を視察させていただきましたが、私も、筑波宇宙センターに通い詰めたムッタ少年やヒビト少年のような気持ちになってきました。もう一回少年に戻れるなら、今度はぜひ宇宙飛行士をめざしたいという思いになっています。

さて、一昨年の「はやぶさ」の帰還、今年 7 月の宇宙ステーション補給機「こうのとり」3 号機の打ち上げ成功、先日の星出宇宙飛行士による船外活動の成功など、このところ我が国では宇宙に関する明るい話題が続いており、今年 5 月の金環日食などとも相まって、国民の宇宙に対する関心も高まっています。私自身、5 月の金環食は職場の屋上で観測し、宇宙の神秘を実感しましたし、7 月には種子島で「こうのとり」3 号機の打ち上げ成功に立ち会うことができ、大変感動いたしました。さらに今年は、「はやぶさ」が到達した小惑星の名前の由来でもある、日本の宇宙開発の父、糸川英夫博士の生誕 100 年という記念すべき年でもあります。

このように宇宙に対する世の中の関心が高まる中で、先の国会で「内閣府設置法等の一部を改正する法律」が成立しました。これにより、我が国の宇宙政策を一体的に推進するための司令塔機能を担う「宇宙戦略室」が内閣府に設置されるとともに、JAXA が政府全体の宇宙開発利用を技術で支える中核的な実施機関として位置付けられました。今回の体制整備を踏まえ、研究開発から実用化、産業化、さらには幅広い利用に至るまでの政策を相互にしっかりと連携させて、省庁の壁を越えた国家戦略として宇宙政策を推進していくことが重要であり、JAXA についても、政府全省庁の行政ニーズに応えていくことが期待されています。

私は、本年 1 月、「国際宇宙ステーション長期滞在ミッション報告会」において、宇宙政策の中長期的な方向性を「古川ビジョン」という形でお示しましたが、この機会に改めて、担当大臣として我が国の宇宙政策についての考えをお話したいと思います。

（実利の追及：宇宙の利用拡大と自律性の確保）

私は、宇宙政策においては、「実利の追及」と「フロンティアへのチャレンジ」の両方が大切だと考えています。この二つは、いわば車の両輪です。

まず私たちの日常生活を見渡してみると、通信・放送から気象予報に至るまで、生活を維持し、豊かにしていく上で宇宙利用は無くてはならない重要なインフラとなっています。また、東日本大震災の折にも、津波等の被災情報を広域で把握するために人工衛星の画像データが大いに活用されるとともに、地上の通信インフラが機能不全に陥る中であって衛星通信が唯一の交信手段となり、宇宙システムの意義が改めて認識されたところです。

改めて申し上げるまでもなく、長年の研究開発の成果として、日本は世界でも最先端の高い宇宙技術を獲得しました。今後は、この高度な技術を基盤として、宇宙の利用を拡大するとともに、我が国が自律的に宇宙活動を行うことができる能力を維持することが重要です。

宇宙の利用拡大について申し上げますと、測位衛星の分野では、実用準天頂衛星システムについて、将来の7機体制を目指し、2010年代後半に4機体制を実現することとしています。このシステムは、GPSを補完するとともに、精度を大幅に向上させ、交通手段の運行支援や農業・建設機械の自動運転などを可能とするものです。さらに、日本のみならず、アジア太平洋地域の基盤的なインフラとして活用されることが期待されています。地球観測衛星については、観測データの共有のためのプラットフォームを構築し、官民のユーザーによる利用の推進を図るとともに、ユーザーのニーズに適合した衛星の開発に取り組んでいかなければなりません。地球観測の分野でも、ASEAN各国が保有を検討している衛星を連携活用することによって、ASEAN防災ネットワークを構築することが検討されています。

また、自律性の確保については、我が国の自律的な宇宙開発利用を支えている、衛星、ロケットを製造する宇宙機器産業や宇宙利用産業といった宇宙産業を維持・強化していくことが必要です。そのためには、宇宙産業を国内の官需のみで支えるのではなく、海外の需要をも取り込まなければなりません。今後は、個々の設備や技術を輸出するだけでなく、事業の設計から運営までも含めたシステムをパッケージとして輸出していきたいと考えています。先に述べたASEAN防災ネットワークなどがその例ですが、こうした取り組みを具体的な実績に結び付けていくためには、研究開発段階から産業競争力の強化を視野に入れて取り組むなど、科学技術政策と産業政策の連携を強化していくことが必要です。

さらに、宇宙の利用は、人類のエネルギー問題を解決する可能性も秘めています。私は今年4月に、JAXA相模原キャンパスで、宇宙太陽光発電の研究を視察しました。実用化までにはいろいろな課題があると思いますが、将来このシステムが実用化されれば、エネルギー問題の解決に大きな貢献をするものであり、今後の研究の進展を大いに期待しています。

### (宇宙の環境問題への対応)

ところで環境問題であるとともに、宇宙空間の利用を進める上でも 避けて通れない現実的な課題が、スペースデブリ（宇宙ゴミ）の問題です。世界が宇宙システムに大きく依存している現在、デブリを増やさないための規範作りやデブリの監視などの分野での国際協力が進められています。

日米間でもデブリの監視について、協力していくことが検討されている上、国連においてこの問題を議論している「宇宙空間平和利用委員会（コーパス）」では、JAXA 出身の堀川康さんが日本人初の議長を務められており、我が国としても、堀川さんへのサポートを含め、この問題に積極的に取り組んで行きたいと考えています。

### (フロンティアへのチャレンジ)

さて野田総理も常々おっしゃっていますが、宇宙は、人類に残された数少ないフロンティアであり、宇宙を探索し、開発利用を進めていくことは、そのフロンティアにチャレンジし、切り開いていくという大きな意味があります。

先日、国際宇宙ステーションに滞在中の星出宇宙飛行士と交信をいたしました。これには、星出宇宙飛行士の母校である小・中・高校の生徒さんたちも参加しました。若い人たちが宇宙に関心を持ち、夢や希望を持つことは、将来の宇宙利用開発に携わる人材を育てるという側面はもちろん、日本全体を元気にすることにもつながります。

1月に発表した「古川ビジョン」では、「国際協力による日本人による有人火星探査」という目標を掲げることを提案しました。この提案は、宇宙関係者の皆様に波紋を呼んだようで、「よくぞ言ってくれた」というお褒めの言葉もいただきましたが、その一方で「予算もないのに大風呂敷を広げてどうする」といったご批判もいただきました。先ほども申し上げたように、私は、宇宙政策においては、実利の追及とフロンティアへのチャレンジの両方が大切だと考えています。実利の観点から宇宙の利用を拡大していくことは大変重要です。と同時に、フロンティアへの好奇心やチャレンジ精神を持ち、大きな目標を掲げることも同じように重要です。この提案を通じて私が申し上げたかったのは、大きな目標を掲げつつ、それに向かって一步一步足元の技術を高めていくことの必要性です。大きな目標があるのとないのとでは、同じことをやるにしても、意気込みや成果が変わってきます。まためざさないでいて、実現することは決してありません。「夢高くして足は地にあり」。これは私のモットーです。私は、今後も宇宙政策を推進するに当たっては、こうした大きな目標を掲げつつ、足元でしっかりと技術開発や人材育成を進めていくことが重要であると考えています。

(おわりに)

以上、宇宙政策担当大臣としての私の考えを簡単に述べさせていただきました。

これまで、JAXA は、名実ともに日本における宇宙の研究開発・航空科学技術の研究開発を引っ張ってきました。その結果として、我が国は、ロケットや衛星を自律的に製造、運用する能力を持つに至りました。このような能力を持つのは、世界でも9か国・地域のみです。

しかし近年、中国を始めとする新興国が宇宙の開発利用を積極的に推進している一方で、我が国の財政は非常に厳しい状況にあり、宇宙政策に多額の予算を投じることは、国民の皆様の理解なくしては不可能です。

そのためには、宇宙の利用を拡大し、それが私たちの生活にいかにより有用なものあるかを理解していただくとともに、フロンティアへのチャレンジ精神を忘れず、宇宙に対する人々の関心を維持し、高めていくことが重要であります。

私は今回の法改正で政府全体の宇宙開発利用を技術で支える中核的な実施機関として位置付けられた JAXA の皆様と手を携えつつ、内閣府に設置された宇宙政策の司令塔機能を最大限に発揮することによって、私たちの生活を豊かにし、次の世代が夢を持てるような宇宙政策を実行に移して、国民の皆様のご理解を得てまいりたいと考えています。JAXA の皆様のご協力を心からお願い申し上げて、私の話を終わらせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。

(以上)